
lines&circles

咲染 アイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

lines&circles

【Nコード】

N7161V

【作者名】

咲染 アイト

【あらすじ】

とある博士が生涯をかけて作り上げた薬、「ラインボール」。
この薬の効能は、「飲んだ人間の人格を反転させる」というもの。
ところが、薬は突然奪われて・・・。

現在更新凍結中。

ブローグ 胸に燃えたるは、浄化と修正（前書き）

はい、大陸ツールライトシリーズ、第三弾です。

説明不足なところがありますが、そこは次回説明します

「いえいえ、これも仕事ですから。」
だから礼よりも、報酬を早く渡してくれ、という言葉を読み込み、
こう続けた。

「またラインボールに関する問題が発生しましたら、俺に言ってください。この俺

カイン・コールに。」

.....

その男の名前、カイン・コール。
決して人殺しではない。
彼が18才にして銃を使い、刀を振るうのには、訳があった。

.....
.....1ヶ月前.....

【デイル・アラウンド研究所】
バアン！

博士が荒々しく研究所のドアが開く音を聞いたのは、「奴」が過ぎ
去ったあとだった。

「じいさん！」
朦朧とする意識の中、声の主が、カインだとわかる。

「カインか.....」
「じいさん！何があったんだ！？どうなっちゃったんだよ!?!」

「『ラインボール』が.....完成した.....。だが、奴に.....悪^ナ
イトメアメイカー
夢作成者に.....盗まれた.....。抵抗してわしも、このざまじゃ
よ.....」

「そんな.....あの薬が、強盗するような奴の手に渡ったら.....」
すると博士は分かっている、というように、弱々しく頷いた。

ラインボールと対になる赤い薬、サークルボール。

この薬を飲むと、ラインボールに侵された人も、元に戻る。

ラインボールで反転していた頃の記憶は、ないことが多いが。

だが、ラインボールを飲んだ人間は、過度にサークルボールを嫌うという。

そんな人に、無理にサークルボールを飲ませようとするのは、危険である。

そこで研究所の研究員たちがカインに作った武器がある。

名を、「サークルガン」、もう一つは「円刀えんとう」という。（カイン命

名、センスがないのは気にしないであげてください。）

カインは、この二つの武器を使い、ラインボールの引用者を元に戻している。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

胸に燃えたるは、浄化と修正・・・

カイン・コールと悪夢ナイトメア作成者、幕引きするのはどちらの手か・・・

ブローグ 胸に燃えたるは、浄化と修正（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第一話 浄化による増員（前書き）

キャラ紹介。

カイン・コール 男 18才

主人公。

なんだかんだ言っ
て結局期待に
応えちゃう人。
そんな役回り。
でも、強い。

追記

サブタイトル編集。

第一話 浄化による増員

「ただいまア」

そう言つて研究所に入ってきたのは、カインである。

「あ、おかえり」

そう言つて返事をしたのは、ここ、デイル・アラウンド研究所緊急所長の、ライン・アファブルだ。

ラインボールによる混乱 通称「反転事件」 により、急

遽研究所は方針を変え、対反転者用対策本部を作り出した。

「反転者」とは、ラインボールによつて人格が反転してしまったもののことである。

「しかし、反転者も増える一方だよな、俺一人じゃさばききれねえよ。」

「まあまあ。君一人が頼りなんだから、頑張つて欲しいな。」
なぜひとりなのか。

理由は、サークルボールにある。

博士が昏睡状態にある今、明確な理由は分からないが、円刀、サークルガンは、カイン一人にしか使えないのである。

ほかの人間が使つても、円刀では誰も斬れない。

ほかの人間が使つても、サークルガンからは弾丸が出ない。

そのため研究所は、反転者の浄化はカインに任せ、サークルボールの研究等をしているのだ。

その過程で研究所は、カイン以外にも武器を使える人間がいる可能性を見出し、常に前線に出るカインに、いくつか円刀及びサークルガンを持たせている。

会う人会う人に、その武器を使わせるのは、容易ではない。

が、どうやら武器を使うことができるかどうかは、サークルボールを持ち、そしてそれらの武器を持ったとき、武器が光るか、といったところにあるようだ。

というのも、最初カインが薬と武器を持ったときに、武器が光ったのだ。

もつとも、見知らぬ人に急に薬と武器を「持て」などと言われても、怪しむのが普通なのだから、容易ではないことに変わりはない。

「で、今回はどうだった？」

「ああ、こいつが報酬だ」

と言って、袋をラインに投げて渡す。

「いつもすまないね。」

そう言いつつも机に袋を置き、こつ続けた。

「時に、カイン君。」

「休ませてくれよ……。」

間髪いれずにカインが返す。

「まだ何も言っていないよ……。」

呆れ顔でいうラインに、悪態を付きつつもカインがこつ言う。

「どうせ次の仕事だろ？どこだ。」

「さすが、話が早い。」

言って、地図、そして紙の束を出す。

「これが、資料だ。次に行ってもらうのは、他国、スライログトだね。」

「ついに外国かよ？悪夢^{やっ}作成者も何考えてんのかねー。国を立て直すんじゃないのかよ。」

ラインが資料を手渡す。

「たまたまそつちに行っちゃったみたいだよ。なぜか。」

「なぜだ。」

はあ、とため息をつき、カインが再びドアに向かう。

「じゃ、行ってくるわ。今日中に帰ってこれるかね？」

「無理だろうね。間違いない野宿。」

「……。」

もう一度ため息をつき、カインは外に出た。

人気のない道に、車の進む音だけが虚しく響く。

カインの運転するその車は、隣国、スライログトへ向かっていた。大國（メルラスも大國だが）へ続くその道に、カインの車以外に、動くものは見当たらない。

一般人なら仕事をしている時間なので、当然といえば当然である。変わりもしない風景を眺めながら、カインは馬鹿でかい車の中で、音楽を聴いていた。

周りの木々は、植林によって行儀良く並んでいる。

このまま退屈な道が続くのか、と思い、カインは鬱屈とする。

空には、雨雲が立ち込めていて、今にも降り出しそうな勢いである。おかげで、さらに気分が沈む。

変化のない旅が続く。

が、突然

女が、木の陰から突然道に飛び出してきた。

長い髪を後ろに束ねたその姿はどう見ても女だが、そんなことを考える暇はない。

「うおっ!？」

妙な声を上げ、急ブレーキをかける。

ザシャアアア・・・。

雨が降っていかなかったのが、唯一の救いであった。

間一髪、なんとかカインは事故を起こさずに済んだ。

「大丈夫か？」

車が走ってきて驚いたのだろう。

すくんで動けない女を立ち上げらせる。

よく見ると、意外に若く、少女、と見ることもできた。

年は、カインと同じくらい　　17、18くらい　　だろうか。

「立てるか？」

再び質問をしたカインに対し、少女はこう答えた。

「あ……、あいつが……。」

「え？」

「あいつが、来る……。」

少女は、自分が逃げてきた方向を指さし、そう言った。

「何が来るって……。」

そこまで言って、物音に、途中で止められる。

「誰だ!？」

その問いには答えず、男がやって来た。

「お前か、こいつの怯えの原因は……。」

カインは、男と女がもめている場合、基本男が悪い、と決めつける
たちなので、そう言った。

しかしそこで、異変に気づいた。

様子がおかしい。

「待てよ、まさかお前……。」

反転者か、とそこまでは続けず、車から二つの武器を取り出す。

「こんなところで会うことになるとはね!」

言いつつ、銃を構える。

一瞬の沈黙。

直後　　男が動いた。

が、カインの弾丸には遠く及ばない。

ダァン!

撃ち出されたその弾丸^{たま}は、一直線に男へ飛んでいく。

着弾　　。

が、男は悲鳴も挙げない。

それもそのはずで、その銃では人を傷つけることは　できないから
だ。

その弾丸は、サークルボールを非常に性質が似ているものである。

少女が驚愕の表情でこちらを見ているが、とりあえずカインは無視し、次は刀を構える。

円刀も、同じく人を傷つけることはできない。

その刀が斬るのは。

「そらよっ!」

ザシュツ……。

その刀が斬ることができるのは、反転者の体内の、ラインボールだけである。

突如、何かが切れたように男が倒れる。

「浄化成功つと。」

カインはそう言い、武器を車に戻す。

視線を感じて振り返ると、少女がこちらを見ている。

おそらくは逃げ出したい気分なのだろうが、先ほどとは別の理由ですくみ、動けないでいる。

このまま誤解されたまま行くのもアレなので、とりあえずカインは誤解を解いていくことにする。

「死んでねえよ、そいつは。気絶してるだけだ。」

言われて、少女が男を息を確かめる。

確かに、眠っているだけである。

「そうか……、その、ありがとな。」

ボーイツシュな感じのその少女は、カインには視線を向けず、彼からはショートカットの髪しか見えない。

「何か、お礼がしたいんだけど……。」

「いらねえよ。急いでるんでな。」

言い終わらぬうちに、カインが返す。

「が、ひとつ思いついたようにこう続ける。」

「あ、いや、やっぱり、お礼ならしてもらっ。」

車から再び武器と、それからサークルボールを取り出し、こう言った。

「ちょっとこれ、持ってくれ。」

「？」
少女は不思議に思ったようだが、特に突っ込まず、指示に従った。
すると

パアアア……。

刀と銃が、光る。

『なっ！？』

二人の声が、重なる。

少女の方は、突然光った武器に対して。

カインの方は、どうせ今回も外れだろうとタカをくくっていたがために。

驚いて少女が手を引っ込めると、カシャンという音がして、地面に落ちる。

途端に光が消える。

「これぁ……スゲエな……。」

前の自分の時以来見ていなかった光を見たカインも、驚きを隠せない。

こういう時は、ラインあいつに任せるに限る。

そう考えたカインは、携帯電話を取り出し早速ラインに電話をかけた。

「なんだい？」

その質問に答えるには少し長い説明が必要になるのだが、カインは全部割愛し、これだけ言った。

「武器を使える奴が、いた！」

突然の叫び声に驚きつつも、平静を装ってラインが聞き返す。

「本当かい？」

「ああ、今代わる！」

そう言っって少女に電話を渡す。

「こいつに事情を聞いてくれ。」

「わ、わかった。」

若干カインに押されつつも、少女が電話に出る。

「えっと、パープル・ツールというものです。」

「驚いた、女の子?」

「あ、はい。」

そのあと、ラーンは、自分たちのことから、先程少女がもった武器のことまで、手際よく教えた。

「それで、僕らとしては君に協力してくれると嬉しいんだけど……。」

「え、いいんですか?アタシなんかそんな面白そうなことに参加しても……。」

「……え?」

てつきり断られると思ったラーンは、不意をつかれてそれしか返す言葉ができなかった。

「なんとか気持ちを着け、こう続ける。」

「とてもありがたいけど、いいのかい?大変だけど……。」

「ええ、もちろん!」

「……じゃあ、カインに変わってくれるかい?」

さっきの人はカインって名前だったんだ、という新事実はさておき、パープルは言われたとおりにする。

「じゃ、カイン君。そういうことだから。」

「どういうことだ。」

「つまり、仲間が増えるということだよ。」

「まじか……。」

振り返ると、パープルは既に車に乗り込んでいる。

「何か嫌な予感がすんだけど……。」

「気のせいだね。」

「絶対違う!」

「じゃ、よろしく。」

そう言ってラーンが電話を切る。

カインの予感が、あたっていることも知らずに・・・。

第一話 浄化による増員（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第二話 小さな出会い、衝撃の遭遇（前書き）

最近、更新遅くなってきてるなあ・・・

キャラ紹介

ライン・アファブル 24才 男

デイル・アラウンド研究所の緊急所長。

優男で、穏やかな口調。

故に、同研究所の女子研究員に人気がある。

カインとは深い仲。

彼に仕事を多く頼むのも、彼を信頼しているからこそ。

第二話 小さな出会い、衝撃の遭遇

「お前・・・親は？」

俺は、とりあえず一番の疑問を助手席に座るパープルにぶつける。

俺とパープルが乗る車は、再びスライログトへの道をゆく。

・・・相手が思案している間に、読者諸君の一番の疑問に答えよう。
なぜ主観かって？

そっちの方が、やりやすいからなのだよ。

・・・俺も、作者もな。

それだけだ。

「親は・・・いない」

彼女の答えにも、俺はさほど驚かない。

18才、いくらなんでも危険な旅に進んで首を突っ込む年とは思えない。

親に心配をかけたくない、と思うのがほとんど、いや、その前に親に止められるのが目に見えている。

が、わかっていることの確認をしたところで、空気が重くなるのは避けられない。

「そうか。悪いこと聞いちまったな。」

弁解をし、運転に集中する。

相変わらず変化のない風景が続く。

しばしの沈黙。

それを破ったのは、パープルの質問だった。

「・・・あんたも、親は？」

来た。

まあ、当然の疑問だろう。

彼女と俺は同じ年で、先程の理論はもちろん俺にも適用される。

「俺も、いない。」

さらりと答える。

今更、この程度の質問で心痛めてたら、こんな仕事務まらない。

「そうか……。」

そう言っていると、彼女は外を見る。

重い空気、変わらない風景。

それを払拭するため、俺はさらにスピードを上げる。

-

-

「着いたぞ。」

そう言いつつ、俺は車を降りる。

見上げても、相変わらず雲が立ち込めている。

あいにく、時間がわかりにくいのが、もう夕方から夜に移行しつつあるんじゃないだろうか。

「……ここは？」

降り立った地、そこはただの平地だ。

道の真ん中が、少し丸くなった程度の、小さな広場。

その脇に車を停めている。

「スライログトとの、国境だ。この車は魔法車だから、これ以上は進めねえ。」

全く、面倒な結界だ。

スライログト以外の国ならこの車で行けるのだが、魔力で動くこの魔法車では、魔力を消滅させる結界の張つてあるこの国に入った瞬間、これは機能しなくなる。

それから、もうひとつ悪い話。

「この先から、そのサークルガン銃が使えなくなるぞ。」

本当に、面倒な結界だ。

この銃は、車と同じく魔力で動く魔法銃だ。

目的地内では、ただの鉄の塊と化す。

「ちよ、ちよっと待って。それじゃあ、任務はどうするんだ？」
パールが、聞いてくる。

「ああ、反転者に出会ったら
俺は、その場合の対処法だけ教え、歩いていく。」

国境を越える。

もった銃が、ふしゅー、という音を立てる。
おそらく、これが使えなくなったのだらう。
暗い道を、さらに歩く。

資料によれば、依頼主は国境近くの村に住んでいるらしい。

-
-

「本当に、着いたぞ。」

そう言つて周りを見渡すが、村なんて大層なもんじゃない。
民家が集まった平地　とでも言えばいいだらうか。

スライログト都市部からは遠く離れた田舎とはいえ、住民も暮らし
にくいんじゃないだらうか。

「とりあえず、依頼主にでも会うか？」

俺の問いに、パープルが答える。

「ああ、そうだな・・・。」

依頼主。

今回は、この村の村長だそうだ。

さて、歩き出そうと、一歩足を踏み出したとき
ガサッ。

音がした。

村の先から発せられたその音に、俺は思わず身構えた。

「だれだっ！」

そう叫ぶ。

その時、やっと俺は異変に気づいた。

俺がそんな小さな物音に反応するのは、普通の村ならおかしいのだ。
この村の異変。

余りにも、静かすぎる

いくら小さな村でも、なぜこんなに人気がない？

この異様な雰囲気、俺たちを取り巻いていく。

突如、人影が出てきた。

思わず、身構える。

その人影の、第一声。

「あー、驚かすつもりはなかったんですけどお……。」

緊張感のかけらもない声に、戦闘態勢を崩す。

その人影が、近づいてくる。

いや、人影「達」と呼ぶべきだろうか。

よく見ると、それは二人いた。

長身の男、そしてそれより少し小さい少年。

その二人が、こちらへと近づいてくる。

俺たちに対して、敵意はない　　ように見えるが、ひとつだけ言えることがある。

(こいつら……強い。)

なぜかはわからないが、俺は漠然とそんなことを感じていた。

そんなことを考えていると、既に二人は眼前に迫っていた。

目前の二人が、自己紹介をする。

「俺は、探偵をやっているジョウウっーもんだ。一応、この村の奇怪を調べてる。」

そうやって胸ポケットから何かを出そうとしたが、その「何か」はなかったようで、隣の少年に問う。

「アルス、名刺は？」

「はあ……僕が持つてるわけじゃないでしょ、と言いたいところですが、これくらい見越して、持ってきてますよ。」

そう言うと、少年が名刺を渡してくる。それと同時に、少年が自己紹介をする。

「僕は、この人の助手でアルス・ロスといいます。」
渡された名刺を見てみると、「探偵事務所ジヨウ ジヨウ・クライ
ン」と書いてある。

・・・まさか、この探偵は自らのフルネームまで省略した自己紹介をしたのか？

非常に、怪しい。

が、こちらも名乗っておく。

「カイン・コールだ。」

もちろんフルネームで言い、名刺を渡す。

俺の渡した名刺には、「デイル・アラウンド研究所研究員 カイン・コール」と書いてあるはずだ。

本当は「浄化員」とでも書きたいところだが、渡した人に首をかしげられるのは目に見えているので、研究員ということにしている。

「ああ、知ってる。メルラスの革命を食い止めてる・・・確か、『
浄化者』とか呼ばれてるんだったな。」

その通り。

俺の俗称は、「浄化者」だ。

が、まさか他国で自分を知っている人間がいるとは思わなかった。そこで、思わずこう返してしまう。

「知ってる・・・のか？」

向こうの方が歳上なので、本来敬語を使うべきなのだが、ついこんな返事になってしまった。

だが、相手はそれに表情を変えることもなく、それ以上に驚くことを言った。

「ああ。基本、過去20年間のトールライトの事件の詳細はすべて記憶しているからな。」

その言葉は、動揺していた俺にとどめをさした。

言葉が詰まる俺は、それを隠すためにパープルを見る。

「ああ・・・あたしの紹介が遅れたな。パープル・ツールだ。あたしも、こいつと同じ研究員、というか浄化者だ。」
探偵は、それに対し眉をひそめて返す。

「へえ？浄化者は一人だと聞いていたが？」
それには、俺が答える。

「ああ、ここへ来る道中に仲間になったん・・・です。」
だ、と言いかけて慌てて敬語を繕う。

だが、それも、手をヒラヒラと振りながら面倒くさそうに
「敬語なんて、いらねえよ。ため口でいい。」

と言うジヨウの言葉によつて無駄に終わった。

そこまでの会話に参加してなかった少年　　アルス　　は、突
然振り返る。

何事か、と思つて俺も村を観察する。

この村は、道の途中を円形にしただけ、ちょうど先程の広場のよう
な空間に家と畑があるだけで、周りは森に囲まれている。

外部との道は、スライログト本国へ続く道、そしてさきほど俺たち
が通ってきたメルラスに続く道の、二つのみである。

アルスは、森を凝視してから、ジヨウに尋ねた。

「一応、数の確認をしておきたいんですが、いいですか？」

全く理解できない問いに、しかしジヨウだけは意味を汲み取り、返
事をする。

「言ってみろ。」

「52・・・間違いないですか？」

やはり意味のわからない数も、やはりジヨウには分かっているよう
だ。

「間違いないな。10時の方向に21人、11時の方向に9人、1
時の方向に23人。まさか、住民全員がやられているとはな。」

この会話。

なぜか、冷や汗が流れる。

まさか、この村が静かなのは、まさか・・・。

「全員が、反転者……？」

自分で言っつて、悪寒が走る。

その、誰にともしなしに発したその問いに答えたのは、探偵でもその助手でもパープルでもなかった。

「その通り。この村の人間は、全員反転した。」

不意に、言葉が聞こえる。

ほとんど反射的に、その言葉がした方に叫ぶ。

上空に向かって……。

「誰だ!？」

声が上空から聞こえたことにはもちろん驚いたが、そちらを見た瞬間に、さらに驚いた。

なんと、誰かが上空に浮かんでいる。

しかし、これをさらに吹き飛ばす言葉を、「誰か」は発した。

「僕の名前……いや、名前などどうでもいい。僕は」

ナイトメアメイカー
悪夢作成者

第二話 小さな出会い、衝撃の遭遇（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7161v/>

lines&circles

2011年11月16日20時12分発行